
大好きな人

ようまま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大好きな人

【Nコード】

N79080

【作者名】

よつまま

【あらすじ】

人生の岐路にたつ、女性二人の友情の物語

「ねえ、セロハンテープ貸してくれない？」

隣の席の女の子は、申し訳なさそうに話しかけてきた。工作の時間、みんな思い思いに創作に挑んでいる。

「いいよ。忘れちゃったの？」英里はテープを手渡しながら聞いた。「ううん、使い終わっちゃったの。」女の子はテープを受け取ると、自分が使う分だけ、いくつか切つて机の端に貼付けた。

「いいよ、いつでも貸してあげるから。」英里は少しうれしかった。転校してきたばかりだったので、話しかけてくれると、心がうきうきした。

「ありがとう。英里ちゃんだね。私は亜希。よろしくね。」彼女はそう言うのと微笑んだ。耳の辺りで切りそろえたおかつぱ頭。そんな髪型をしても、どことなく大人びて見える。とても英里と同じ年には見えなかった。

「私、彼女のこと好きになりそう。」英里はそのとき、そんな風に思った。

—
—

最後の食器を棚に入れると、部屋は新しく生活を始めることができる状態に、かろうじてなっていた。

薄っぺらい傷だらけのフローリングには、アクリル製の緑色のラグ、ちよつとの振動で倒れてしまっいそうなほど安っぽい鏡台、古びて油が染み付いた台所。作り付けの扉を閉めると、蝶番のゆるみが見えなくなる。扉のベニヤははがれ、黒ずみがよく見えた。

英里は段ボールを始末している亜希の方を振り向くと「終わった。」と声をかけた。亜希は顔を上げ「こつちもそろそろ。」と答える。

せまいベランダへと続く窓からは、沈み行く夕日が見える。亜希の顔は逆光で陰に隠れ見えなかったが、その声からこの新しい出発に期待しているのが伺えた。

「良かった、バイトの時間に間に合って。」亜希がほっとした声を出した。

「私がんばったからよ。」英里は恩着せがましく答える。

「ああ、のどが乾いたわ。何か冷たい飲み物買ってくる？」英里が問いかけると、「ウーロン茶ならあるわ。」と亜希が台所の方へと、まだ散らかっている梱包材や場所の決まらない雑貨達を、ひよいひよいとよけて歩いてきた。

二人ともうつすらと汗をかき、頬は上気している。亜希は仕舞ったばかりの戸棚から二つのグラスを取り出し、小さな冷蔵庫で冷やされた、ノンブランドのウーロン茶を注いだ。

「甘いお菓子かなんか、ないの？疲れたから糖分が欲しくって。」英里がリクエストを出すと、亜希はとんでもないというように肩をすくめた。

「貧乏学生がそんな贅沢品を常備しているとも？我慢して、砂糖でも舐めてよ。」

「何よ、感謝の心がないわ。私が手伝ったから、安く引越してきたんじゃない。」英里は頬を膨らませ、それから少し笑った。

二人して渋谷の雑貨屋で売っていた丸テーブルに移動すると、安堵のため息が出る。

これから亜希は新しい暮らしをスタートさせるのだ。

「このラグ、ちくちくするわ。」英里がラグの毛を指でなでながら言う。

「しょうがないでしょう。とっても安かったんだから。」

「じゃあ、引越祝いには、ラグに敷く柔らかいブランケットにしようかなあ。」

「じゃあ、そのブランケットがあるなら、このラグはいらないってことじゃない？」亜希が笑いながら言った。

窓からの日差しが、この小さい空間を茜色に染める。二人は向かいあつて、この時間を楽しんだ。

「専門学校はいつ始まるの？」英里が訊ねた。

「来週からよ。」

「それまでは、余裕があるの？」

「ううん、バイト三昧よ。こんな部屋でも家賃を払うつてなったら、かなりかかるし、それに学費ローンの返済もあるから、働かないと。」亜希の眉間に少ししわが寄る。

亜希は高校を卒業してからのほんの二週間で、ぐつと痩せたような気がする。もともと細く華奢な印象だったが、それが更に病的なほど細くなっている。鎖骨までのストレートの髪を後ろで一つに縛り、その細い首が一層際立って見える。けれどその目には、これまでに見られなかったような輝きがある。きつとこの出発に期待を寄せているのだろう。

英里は静かに亜希を見つめた。彼女とはもう、小学校四年生からの仲だ。楽しいときも、つらいときも、共に過ごしてきた。育った家庭は違えども、英里は亜希のことを運命共同体だという気持ちになるときがある。すべての秘密を共有している。初めての恋、初めてのキス、初めてのセックス。彼女のことは全部知っている。

「家を出ること、おかあさんなんて言ってた？」英里が訊ねた。

「さあ、何も言わずにできてきたから。きつと今も、私が出て行ったことに気づいてないんじゃないかな。気づいたとしても、出て行ってほつとしたぐらいに思つてると思う。」亜希が投げやりな調子で返答する。

「またそんなこと言つて……。」英里は亜希のその表情を、もう何十回と見てきた。「子供を思わない親なんていないと思うけど。なんか、ちよつとしたすれ違いか食い違いか、そんな気がするよ。一度落ち着いて話してみたら？離れると、親のありがたみもわかるんじゃない？」英里は亜希に言った。

「……かもしれないね。」亜希はちよつと首を傾げると、暖かみ

のある笑みを浮かべた。

彼女の母親は父親と離婚し、女手一つで彼女を育てた。きっと苦勞も人一倍だっただろう。亜希は母親の職業を明言したことはなかったが、彼女の言葉尻から、ホステスのような仕事をしているのではないかと英里は思っていた。

「英里は？ 大学はいつ始まるの？」 亜希は話題を変えた。

「亜希の専門学校と一緒に。来週から。今から楽しみ。どんなサークルに入ろうかな。」

「やだ、遊ぶ話ばかり。」

「もちろん、勉強しに大学に行くんだけど、でも新しい出会いがたくさんあるのよ。本当にわくわくするわ。」 英里は自然と声が大きくなった。

「ふふ、英里らしいわね。」 亜希が言う。「だから髪型を変えたの？」

「そう。最初の印象が肝心でしょ？ 色を明るくして、毛先をカールさせたの。やっぱりある程度異性を意識してね。」 英里は少し照れていった。

「似合ってるわよ。中身を知らなければ、多少男が寄ってくる感じ。」

「亜希は意地悪そうにいった。」

「何よそれ。」 英里はふっと口を尖らした。

いつの間にか部屋は薄暗くなっている。亜希は立ち上がり、紐を引っ張り、部屋中を痛いほど真っ白に見せる蛍光灯をつけた。

「カーテンも閉めなくちゃ。」 英里はパイプベッドを超えて、窓のカーテンを閉めた。

「そろそろ、バイトの時間だ。」 亜希がうんざりというように首を振る。

「今日くらい休んだらいいのに。」 亜希のその細い身体を見ると、英里は思わず言いたくなった。

「とんでもない。私に休みなんかはないのよ。働かなくちゃ。」 亜希がきっぱりと言いつつ切った。

英里はコップを流しに片し、部屋を見回した。女の子一人が住むには、あまりにも質素で不用心な部屋。

名ばかりの玄関で靴を履くと、英里は亜希の目をまっすぐと見つめ言った。

「ねえ、困ったら言って。私、なんでもするから。私たちはこれまでそうやって、助け合ってきたでしょ？」

亜希の顔に幸福が滲む。

「もちろん、これからも。」亜希が言った。

英里はギシギシと鳴るアルミドアを開け、彼女を振り返る。亜希の細いシルエットは、決して弱々しいものではなかった。

「じゃあ、またね。メールするわ。」

「今日は本当にありがとう。助かった。」

英里は扉を閉め、錆びた鉄がむき出しの階段を下り、家路についた。

「井田君は私のこと、嫌いになつたのかしら？」

英里は亜希と一緒に図書室の一角に座り、お互いの額を寄せていた。窓からは初夏の風と、校庭で騒ぐ男の子達の声が入ってくる。図書館全体に、若葉の匂いと古い紙の匂いが充満し、それを心地よいと思う少数の女の子達が、それぞれグループを作つて座つていた。

「どうしてそう思うの？」古い児童図書で顔を隠しながら、亜希が小さな声で問いかける。

「だって、いつのまにかみんな知つてたもの。私たちの秘密だつて、約束したのに。」英里は声がだんだんと震えてくるのを止められなかった。涙をこらえているのだ。

「秘密つて？あのこと？」亜希が問う。

「うん。そう。」

亜希はしばらく考え込む。切れ長の目は本のページに注がれているが、文字を追っている訳ではない。英里はそんな亜希の様子をじつとみつめる。自分はきつと、今救いを求める顔をしている、英里はそう思った。

「井田君に聞いたの？誰かにしゃべつたのかつて。」

「ううん、怖くて聞けないよ。」英里は手元の本をそつとなぜる。

「じゃあ、聞いてみるのが先じゃない？井田君がしゃべつたんじゃなくて、誰かが二人を見ていたのかもしれないじゃない。」

「・・・そうだよね、うん。」英里は自分を納得させるように、つぶやいた。

「でもね。」亜希は英里の手をぎゅつと握つた。

「秘密を守るつて、とつても難しいことよ。嫌いになつたからしゃべつたわけじゃなくて、うれしくて黙つていられなかつたのかもし

れないじゃない？秘密を守らなかつたからって、責めるだけじゃだめだと思う。理由を聞いて、それから、井田君が英里のこと、まだ変わらず大好きだつてことがわかれば、それ以上は問いつめない方がいいわ。きつとまた二人で楽しく遊べると思う。」亜希は言った。「亜希って・・・」英里は少し首を傾げて亜希を見た。「亜希って、たまにすごく大人っぽいこと言うよね。」

「・・・そうかな？」亜希が小さく笑う。その白い頬の右側に、小さなえくぼができた。

「そうよ。私なんか、悩むだけ悩んじゃって、どうやって解決したらいいかなんて、思いつかないよ。」英里は頭を抱えた。ポニーテールが揺れ、首に毛先が触れる感触がある。

「ねえ、もし・・・」英里が言う。

「もし、井田君が私のことを嫌いになつて、だから私たちの秘密をみんなにしゃべっちゃつたんだつてわかつたら？」

「・・・それは英里に意地悪したいから、井田君がしゃべつたつてこと？」亜希は静かに問いかけた。「そしたらね、私が井田君を殴りにいく。」そして亜希が力強く言う。

「殴っちゃうの？」

「そうよ、殴りつけてやるわ。そんな卑怯な方法を使うなんて、酷いもの。」亜希は眉の上で切りそろえた前髪を、うつつうしいというように、手で払った。彼女のつるつとした額が見える。その眉にはすでに怒りが滲んでいるかのようだ。「なんか、極端。」英里が言うと、亜希が「悪には戦いを挑まなくちゃ。」と答えた。それから二人でくすくすと笑い出す。亜希の手に支えられていた本は、その振動でかたかたとなった。

「そこ、図書館では静かにね。」黒板の前に座っていた、図書担当の先生は、厳しい声を出した。

二人は「やばい」というように首をすくめ、それから目で合図をして、パイプ椅子から立ちあがった。自分の本の貸し出しの手続きをしてから、英里と亜希は廊下へと歩き出した。両側を教室に挟まれ

ている廊下には日差しが入らず、冷んやりとした空気が流れている。放課後の校舎にほとんど人影はなく、嘘のように静かで、二人の上履きがビニールの床を踏むぺたぺたという音だけが、嫌に大きく聞こえた。

二人はランドセルを取りに、教室へと向かった。その間もおしゃべりは途切れない。「井田君に聞こう」と英里の気持ちは固まったが、それをいつ、どこで？と考えると、とたんに気持ちがなえてしまう。それを亜希が明るく、そして厳しく励ました。

「初めて男の子とキスをしたの。井田君と。なんだか、変な気持ちだったけど。でもドキドキした。」英里はその出来事の後、すぐ亜希に報告した。学校から家までの、短い秘密の時間に。新しく素晴らしいことが起こったという、興奮と歓び。そしてちよつとの不安が英里の心を占めていた。「これって、してもいいことなの？」そんな英里に対して「気持ちが通じ合っていれば、キスしてもいいと思うわ。」と、亜希は優しく言った。

「とっても神聖で、とっても純粹だと思う。」確かに幼なすぎる、まだ早い、よくない行いだっていう大人の主張も耳に入ってはきていたが、恋しいという感情を知り始めた子供たちにとって、好きな男の子とキスをするということは、とても魅力的なことなのだ。やっぱり心からのキスなら、美しいはず。自分が小学生なのか、大人なのか、なんて関係ないのだ。

それを聞いて英里は少しほっとした。「そう、心が通じ合ったっていう気がしたわ。井田君のことが、とっても好きって、そう思った。」

「よかったじゃない。大切にしなくちゃね。」亜希が言うと、英里は更に一層、胸が高まるのを感じた。

六年三組のクラスの引き戸を開けると、教室には男子が一人だけ残っていた。

窓際の席に座っている。井田君だった。髪は汗でしっとりぬれ、

その端正な顔立ちは真剣そのものだ。英里を待っていたかのように、顔を上げる。日直が最後の戸締まりをした後だったので、窓は閉め切られ、チヨークの粉と埃が床にうつすらと積もっているように見える。

井田君が席を立つ。英里は亜希を振り返る。亜希は「わかった」というように頷くと、自分のランドセルを取り、二人を残して教室を出ていく。

英里はポニーテールの後れ髪が気になって仕方がない。ジャンパースカートも短すぎたんじゃないだろうか。亜希に「大丈夫かな？」と目で問いかけると、亜希が安心させるように微笑み、扉を閉める。そして英里は、井田君と向き合った。

- - -

新入生歓迎会と称するどんちゃんさわぎが終了し、しこたまお酒を飲んだ若い男女が、群れをなして新宿の歌舞伎町を歩いていた。早朝の歌舞伎町は、腐ったゴミとアルコール、それから一晩中騒いだ人たちの疲れに淀んでいて、英里はどうしても好きになれなかった。かくいう英里も、一晩中カラオケボックスのタバコ臭い密室に入つて、のどが枯れるまで騒いでいた口なのだけれど。英里はこの新歓コンパに少し期待していたのに、男の子達のあまりの外れ具合に、必要以上にはしゃいでしまっていた。

どんなに化粧を直しても、顔の疲れは隠せず、英里は一刻も早く家に帰りたい気持ちでいっぱいだった。

「今日は楽しかったな。」上級生の男子が英里に馴れ馴れしくしゃべりかける。その執拗なモーションに、英里はうんざりしていたが、このサークルでしばらくやっていくことに決めていたので、疲れた顔に必死に笑顔をはりつけ、話に応じ始めた。

「楽しかったですね、本当に。」

「また一緒に遊ぼうよ。今度はゆっくり飲むのもいいよね。英里ち

やんつて、いつもどこらへんで遊んでるの？」上級生は明らかに必要のないボディタッチをしてくる。英里はそつと身体を遠ざける。

「新宿はあまり来ないですね。なんだか、治安が悪そうで。女の子同士では、歌舞伎町なんてなかなか来れないでしょう？」

「うんうん、そうだね。いかがわしい店もたくさんあるしね。まあ、男にとつちや、割と天国？」そういつて、少しもおかしくないのに笑い出す。

「じゃあ、今度、青山とか代官山とか、落ち着いた町に行かない？俺、こつ見えてもカフェ巡りとか、趣味なんだよね。」

「へえ、本当に意外ですね。」英里はちよつぴり嫌みを交えながら答えたが、本人はまったく気づいていないようだ。

コンクリートの道路はゴミだらけ。早朝の空気がさわやかだなんて新宿には当てはまらないな、英里はぼんやりと考えながら、上級生の話を曖昧に聞き流していた。

ゴミ袋にたかる、たくさんのカラス達。薄汚れた雑居ビルには、薄汚れた数多の風俗店の看板。人目を避けるように、うつむきながら暗い階段を下りてくる、男性達。

「後ろめたいなら、行かなきゃいいのに。」英里は思わずつぶやいた。

「はい？なんて言ったの？」上級生がアルコール臭い顔を近づける。英里は思わず顔をそむけ「なんでもないですよ。」と答え、そして直後、視界に入ったものにはつと息をのんだ。

雑居ビルの細く急な階段を下りてくる女性。短いスカートからは、あまりにも細い足。彼女はうつむき、早足だ。顔はよく見えなかったが、そのつるりとした額に見覚えがあった。服装も、ちよつとした仕草も、すべて英里の記憶と一致している。

亜希だ。

彼女は一人きりで、唇をきゅつと引き、全身からは、英里のそれとは比べ物にならないほどの疲れが伺えた。

亜希が視線を感じたのか、顔を上げた。そして英里の方を見る。そ

の瞬間、彼女の顔に見たことのない表情が浮かんだ。衝撃？絶望？思い切り誰かに顔を殴られたって、こんな顔にはならない。

亜希は再び顔を伏せ、半ば走るように駅の方向へと立ち去った。英里は思わず立ち止まり、彼女の背中をただ見つめ続けた。

「亜希だ。なぜ、こんな時間に、こんなところで。私と目が合ったのに、声をかけてこない。」

英里は亜希が出てきた雑居ビルを見上げる。どのフロアの窓にもビールの目張りがあり、そこにはド派手な風俗店の名前。このビルから亜希が出てきた。英里はしばらくその意味を考えた。いや、考えなくてもわかっていただけけれど、英里にはとても受け入れられることではなかった。

「どうしたの？英里ちゃん。」上級生が突然立ち止まった英里の手を引こうとしたが、英里は彼に配慮することも忘れ、乱暴にその手を振り切った。鞆から携帯を取り出し、アドレスから亜希の番号を出す。

「電話する？今？でも、なんて言うの？」

英里は聞いたかった。「さっき私と目が合ったよね？あんなところで何していたの？私はね、新歓コンパの帰りよ。亜希もそうなんだよね？」

英里は完全に動揺していたが、かろうじて今すぐ電話するのは思いとどまった。理由があるんだ、きつと。今日たまたまあのビルに用事があっただけ。少し落ち着いてから、ちよつとだけ聞いてみよう。軽い感じで、なんてことはないように。ただの誤解なのかもしれないし、いや、きつと誤解なのだから。

英里は目を閉じ呼吸を整えると、再び鞆に携帯を戻し、歩き出した。けれど頭の中は、先ほど見た光景の説明を、どうやって亜希に問いかけようか、そればかりが渦巻いていた。

校門で亜希の姿を見つけると、英里は鞆を抱え駆け寄った。

秋風の中に冬の香りが混じり始めている。亜希の厳しくこわばっていた表情は、英里を見ると、ほんのちよつとだけ緩んだように見えた。亜希はのばし始めた髪を一つに編み、右肩にたらししていた。きつちりと編み込まれたその髪を見ると、亜希が鏡の前でどんな顔をしていたのか容易に想像できる。英里は今できる限り、最大の笑顔を見せて、亜希の隣を歩き出した。

ここ何日か、歩道を埋めるように落ちていた枯れ葉は、誰かの手によつて掃き清められ、今は埃っぽいコンクリートがむき出しになっている。二人はエナメルの靴底がコンクリートをかつかつとたたくの音を、無言で聞いていた。口を開けば、話すことは決まっている。今はしばらくお互いの存在に安堵すればいい。

亜希の制服の袖は、すり切れている。英里は冬服を二着持っていたが、亜希は一着をずっと着続けていた。濃紺のプリーツは摩擦でてらてらと光っており、まだまだ卒業までには時間があるのに、制服はすでに限界を訴えているようだった。

静かな住宅街の中にあるせいか、英里達を通う中学校には、素行の悪い生徒というものはほとんどいないと思われていた。学力も公立の中では高く、大半の学生が有名私立高校に進学する。英里の両親も私立高校への進学を期待しているようだったが、英里は亜希と同じ高校を受験しようと考えていた。それ以外は考えない。今この時点ではとても考えられなかった。

二人は都内にありがちな、小さな敷地目一杯にたてられている小さな一軒家が連なる歩道を抜けて、幼児達が母親と遊ぶ小さな公園へとたどり着いた。下校する同級生達を横目に、二人は青く塗られた

ベンチに腰掛ける。

午後三時、そろそろ子供達はおやつを食べに、暖かな家へと帰るの
だろうか。この下校時間をすぎれば、部活動の時間が終了する夕方
まで、このあたりは静かになる。

英里は亜希を見やる。彼女は誰かのお下がりなのだろうか、使い古
し、ぼろぼろになった革靴の上で手を組み、まっすぐと前を見つめ
る。その目線の先には、ブランコに乗る子供と、その背中を軽く押
してあげる母親。共に笑顔だ。愛情をなんの疑いもなく、素直に受
け入れられる年齢。

「今日はどうだった？」英里は亜希に問いかける。いつもの質問、
そしていつもの答えがかえって来る。

「変わらない。誰ともしゃべらなかつた。」亜希は静かに答える。

「大丈夫？」英里は彼女の顔を覗き込むように訊ねる。

「うん、なんてことないわ。もう慣れた。」亜希の目尻がきゅつと
あがったように見えた。

二年生の春、亜希とクラスが別になってしまった英里は、少なから
ずショックを受けた。これまでずっと、幸運なことに同じクラスで
いられたし、亜希のいない教室で自分の居場所を見つけられるのが、
不安だったからだ。亜希もそれは同じようで、クラス表を前にして、
二人して呆然としてしまった。

けれど、英里は比較的早く新しいクラスにとけ込めた。英里はいつ
も笑顔を絶やさないようにしたし、誰かの意見にいつも同調するよ
うに心がけていたから、既存のグループにも素直に受け入れられた。
亜希も当初、新しいクラスで新しい友達を見つけたようだった。二
人はクラスは別であったけれど、下校は待ち合わせをして、互いの
一日を話し合った。亜希の口から、気の合いそうな女の子の名前が
出てくると、英里は寂しくもあつたけれど、反面うれしくもあつた
のだ。なぜなら亜希は割と人見知りをする方で、きりっとしたその
表情は、人と距離を置きたいのではないかと思わせるものだったか

らだ。

いつから亜希は、こんな表情をするようになったのだろうか。英里が初めて亜希と会ったときには、もっと幼く、そして女の子らしかった。しかし気づけば、彼女はだれよりも大人っぽく振る舞うようになっていたし、事実誰よりも大人だった。

その亜希が心底参っている。今この現状に、打ちのめされていた。英里はなんとかしたかった。

亜希がクラスの子達から無視されるようになったのは、五月の半ばあたりからだ。と記憶している。はじめはグループの特定の女の子が、突然よそよそしくなり、次第に話しかけてもまるで亜希がそこにいないかのような態度をとるようになった。それがあつという間に、クラス全体に広がったのだ。

最初、亜希は積極的に動いた。

「なぜ、私を無視するの？悪いところがあるなら言ってちょうだい。言ってもらわなくちゃわからないわ。」

けれど帰ってくるのは「わからないの？」というような視線ばかり。次第に亜希は疲れ、クラスの誰とも話をする事がなくなった。

休み時間、亜希は机に座ったまま、身動き一つしない。女の子達がファッションや芸能の話をしている横で、亜希は時が過ぎるのをじっと待っていた。

英里は休み時間ごとに亜希のクラスに行って、亜希と話をしたかったが、やはり別のクラスに足を踏み入れるのは、とても勇気がいった。だから英里はどんな用事があるうとも、亜希と必ず下校することに決め、そう亜希に伝えた。そのときの亜希の表情が忘れられない。感謝だけではない、深い深い愛の表情。英里は亜希のために全力を尽くそうと思った。

「大丈夫、クラスが変われば、きっと変わるわ。」英里は亜希の腕を軽くたたき、明るく言った。「また同じクラスになるといいわね。」

「平気よ、変わらなかつた。いつかは終わることだもの。」亜希は堪えるように言った。

「そう、必ず終わるわ。」英里は励ますように言った。

「でも・・・」亜希がうつむく。「また別の社会でも、無視されてしまうかもしれない。だって原因がわからないんだもの。私が何かしたのかもしれない。もしかしたら取り返しのつかないことをしたとか、言ったとか。理由が知りたいの。どうして私が今とても孤独なのか。一人きりなのかを・・・でも誰も教えてくれない。それじゃあ、また繰り返しちゃうかもしれないわ。」亜希が胸の奥から声を出す。

「・・・無視って、一番酷いじめ。」英里は言う。「悪態や暴力よりもずっと酷い。よくいじめられた方にも原因があるって言うけど、それって無視されたことのない人が言ってるんじゃないかな？理由を聞いているのに無視して、それでいて、言わなくても理解しろなんて、どれだけ傲慢なのかしら。」英里はしゃべっていて、だんだんと怒りがこみ上げてくる。機会があれば、亜希を無視する全員を殴ってやりたい、そう思った。

日差しが徐々に弱まり、寒さが下の方からあがってくる。ブランコに乗っていた親子は、とうの昔に帰っていた。けれど二人はまだ家路につきたくなかった。亜希の母親はそろそろ出勤の時間だ。この時間、亜希は家に帰りがらない。きつと母親と顔を合わせたくないのだろう。家にも、学校にも居場所がないのだ。

「私・・・そんなに嫌な女かな？」亜希がつぶやく。「英里みたいに親しみやすいタイプではないかもしれないけど、こんな風に疎まれるような女なのかな。」

英里は少しびびくりした。亜希はあまり弱音を吐かないタイプだったし、とにかくこの局面を必死に乗り切ろうとしているように見えていたから。

亜希は想像以上に落ちている。

亜希が静かに続ける。「きつと私が何かしたのよ。言ったか、何か。」

みんなが態度で示すように。私がろくでもない女なのよ。私は理由を聞きたいの、理由を。私でも誰も答えない。私を全身で拒否してるの。・・・悔しい。」彼女は静かに泣き出した。本当に静かに。肩が少し震え、呼吸が浅くなる。

英里はたまらなくなつた。なんでこんなことになつたのだろう。亜希が悪かつたのか、どうなのかなんて、もう関係ない。彼女が今ここで孤独に苦しんで、泣いているという事実が、一番重要なことのように思えた。

「たとえ理由が何にせよ、問いかける人を無視するなんて、最低だと思つわ。言いたいことがあるば、言えばいいのよ。みんな卑怯だわ。」英里は震える亜希の肩をそつと抱き寄せる。

「大丈夫、私は側にいるわ。絶対に裏切らない。もし仮に亜希が悪いことをしたつて、亜希が私に話しかけてくる限り、絶対に無視したりしない。裏切つたりしないわ。だから、大丈夫よ。私がいる。」英里は力強く言った。

亜希の細い首に手を回し、彼女の肩に額をつけた。

「・・・ありがとう。」聞き取れぬほどの小さな声ではあつたが、彼女の発する息が英里の首にかかり、その熱い感触で、心からの感謝であることが英里には理解できた。

- - -

見間違いではなかつた。

あれから何度も思い返した。本当に彼女だつたのか？あの亜希だつたのか？英里は携帯を見つめ、何度か連絡しようとしたが勇気がでなかつた。なんと言うの？「亜希、あなたあそこで働いてるの？」そして「そうよ。」と言われたら？その返答が恐ろしかった。おそらく真実であるう、その返答が。

新しく始めた喫茶店でのバイトは、それほど実入りのいいものではなかつたが、その店内の雰囲気と香ばしいコーヒーの香り、そして

店主の人柄で、心地よく働くことができていた。

英里は棚に並べられた陶器の器を、手に取って磨く。ただ飾られているものではない。このカップでお客様に淹れたてのコーヒーを出すのだ。

丁寧な心を込めて磨く。店主はお店が始まる前、必ずカップを磨くように言いつけた。心がこもるから、大切なカップだからだと。冷たいカップが、乾いた布で磨きだすと、暖かくなってくる。人の手で触れているわけではないし、コーヒーを注がれているわけでもないのに。それはとても不思議な感覚だった。

今日は日曜日。大学が休みの日は、開店から閉店まで働く。

仕事中は携帯の電源を切るよう言われていた。英里はカウンターの陰で、最後のメールチェックをしようと携帯を開き、その表示を見てはっとした。

亜希からのメールが一通。

中を開くと、いつもと変わらない彼女のメッセージ。

「今夜何してる？私、バイトが急にキャンセルになっちゃって、暇なの。英里のバイトが終わったら、私の新居に遊びにこない？」

英里は躊躇した。どうやって返したらいいのか。亜希と会えば、きっと訊ねてしまう。「あのとき、目があったよね？」

「英里ちゃん、そろそろお店始めるよ。」白髪の穏やかな表情の店主が、カウンター脇から声をかけた。

英里は少し考え「いいよ。また後で連絡する。」と返信した。

夜道を足早に亜希のアパートまで歩く。亜希に会いたい気持ちと、会いたくない気持ち。「私はいつも通りに笑えるだろうか。」英里は不安だった。

玄関のチャイムを鳴らすと、上下スウェット姿の亜希が、扉を開けた。いつもと変わらない様子。英里の到着を心待ちにしていたようだ。

「遅かったじゃない、お腹ぺこぺこ。」亜希が英里を迎え入れる。

小さな部屋いっぱい、カレーの香りが広がっていた。テレビからはバラエティ番組が流れ、時折そこから、作られた笑い声が響いている。

「カレーにしちゃった。簡単だし、経済的だから。一品だけよ。サラダなんかは作ってないからね。」亜希は英里に背を向けて、キッチンで英里の食事の用意をしている。

「手を洗ってきて。食べようよ。飲み物はお水でいいかな？」亜希は背中越しに声をかけた。いつもと変わらないように見えたけれど、やはりどこか違うかもしれない。いつもよりはしゃいでる？いつもより、そう、ずっと年相応のティーンネージャーのようなしゃべり方だ。英里は心臓がときどきし、言いようのない不安がこみ上げる。二人で丸テーブルに向かい合つと、作られた笑顔のまま食事を始めた。

学校はどんな感じ？友達はできた？今何の授業を取ってるの？当たり障りのない会話が続く。その間も、英里は亜希の顔をまともに見ることができない。目線が合いそうになると、どちらともなくテレビに目をそらし、楽しい芸能の話をはじめ。このタレント、面白いね。この冗談は、あんまりセンスよくないよね。

番組も終わりに近づき、無意味なコマーシャルが続く。自然と二人は黙り込んだ。英里は話そうか話さないか、迷っていた。話さなかったら？

これからずっと、亜希とは隔たりを感じながら、お互いの心の奥まで入り込まずに、笑顔をうかべつつつきあっていくことになる。

英里はそんなこと、望んでいなかった。亜希はソウルメイト。支え合ってこれまでもやってきた。だからきつと今回も、話した方がいいのだ。このままあやふやにしてはいけない。

「お皿洗うね。」亜希が食器を台所へと下げる。英里はその後ろ姿を見ながら、心を決めた。

「亜希、この間新宿で目があったよね。」
水を洗い桶にためながら、亜希は身動き一つせず、答えもしなかつ

た。英里は再度問う。

「あれは亜希だよ。なぜ、返事をしないの？」

「今日、その話をしにきたの？」亜希のこわばった声がかえって来る。

「亜希は違う？話したかったから私に連絡してきたんじゃないの？」

「・・・違うわ。いつも通り、英里と過ごしたかっただけ。」亜希が答えた。

「ねえ、ちゃんと話さない？うやむやにしておくなんて、私はできないよ。」

すると亜希が手を拭い、振り向いた。顔つきが厳しい。どこことなく英里を拒絶しているかのような。

バラエティ番組は終了し、あまり人気のない連続ドラマがスタートしていた。

亜希は元の席につくと、まっすぐ英里をみつめた。

「新宿で目があったのは、亜希だよな？」英里は重々しい口調で訊ねた。

「もう、わかってるんですよ。」亜希がなげやりに答える。

「・・・あそこで何してたの？」英里は少しためらってから、勇気を持って訊ねた。

「それもわかってるんですよ？」亜希が深いため息と共に答える。

「想像どおりのことよ。」亜希が言った。

「それは・・・あそこでバイトを・・・風俗のバイトをしてるってこと？」

亜希の細い首に、ぐっと力が入ったのが見えた。

「そうよ、私のバイト先。」

英里は叫びたい気持ちをぐっと堪える。

「なぜ、そんな・・・。他にもバイトはたくさんあるのに。」

「立派な仕事よ。男性にサービスして、お金をもらうの。何がいけないの？」

「だって・・・だって、そんな仕事、亜希が望んでしてるなんて思

えないよ。耐えられる訳がない。どうして？私に一言相談してくれてもよかつたじゃない？力になれるはずよ。」英里は懸命に訴えた。「ねえ、辞めよう、そんなバイト。もつといいバイトがあるし、一緒に探すから。」

すると亜希の頬に、笑みが浮かぶ。それは決して喜びの笑みではなかった。

「英里、生きるってどれくらいのお金が必要か知ってる？屋根のある部屋で眠り、食べ、飲む。それだけのことなのに、びっくりするくらいのお金がかかるのよ。学費のローン返済に教材費。電車に乗るのだって、毎日が積み重なればすごい金額。とても間に合わないのよ。英里は知らないでしょ？生きるために必要なお金は、これまですべて親に支払ってもらってきたんだから。」

「お金？一人で暮らすから、お金が必要ってことなの？じゃあ、無理に家を出なくてもよかつたじゃない！ちよつと気まずい思いをしたって、親と暮らせば生活費の心配はしなくてすむわ！」

「・・・明け方、母親が酔っぱらって帰ってくる。私は扉越しに母親が一人なのかどうか確認するわ。一人なら、母親はそのまま衣類を脱ぎ捨てて眠るだけ。でもたまに、母親と同じようにお酒に身体を乗っ取られた男の声がするときがあるわ。そんな時、私は扉の鍵を閉め、机の引き出しからはさみを出して枕の下に隠す。そして毛布をかぶり、早く二人が眠ってくれないか、必死に祈るのよ。」亜希がたいしたことではないというように話す。

「私はほんの小さな物音で起きてしまう。男が家に居座るときは、緊張で夜眠れないわ。自称将来の父親に、夜中突然襲われたときから、ずっと緊張している。」

英里は思いもしなかつた告白に、殴られたような衝撃を受けた。

「そんなこと・・・そんなこと、私に一度も話さなかつたじゃない！」

「中学生の英里には、話しても仕方のなかつたことでしょ？何にもできなかつたわ。」

「じゃあ、母親は？相談すればよかったのに。」

「知ってたわよ、あの女は。でもね、あの女は男が逃げていくことの方が怖かったのよ。見てみぬふりだった。・・・家をでて大変なこともちろんあるけれど、この部屋で私は朝までぐっすり眠ることが出来る。男の気配に、息づかいにおびえることなく、朝までね。それは私が本当に欲しかったもの。」

「・・・わかった。家には帰れないのね。じゃあ、私のバイト代、全部亜希にあげるわ。亜希のために働く。それなら辞められるでしょ？」英里は亜希を救いたかった。

すると亜希が静かに笑う。

「何がおかしいの？」英里が必死になればなるほど、亜希の存在はどんどんと遠のいていっているような気がした。

「だって、あまりにも想像通りの反応で。英里ならきつと、そう言うだろうって思ってたから・・・。英里、いつが終わりがわからない、金銭の援助を続けられるの？大学を卒業して就職しても？結婚して子供ができても・・・」亜希が続ける。

「母親から得た唯一の教えは、一人で生きていけ、っていうこと。あの女は男に頼りすぎていた。だから男が倒れば、あの女も倒れるの。そうやって生きると、自分の人生は手に入らないってことよ。私には目標がある。専門学校を卒業し、いずれ店を持つわ。英里のように大学の時間を社会へ出るための猶予期間なんて考えていない。私の中を通り過ぎる時間は、すべて私のもの。全部、無駄になんかできないのよ。だから割のいい仕事を選んだ。若い、今しかできない仕事。」

「そんな！きつと何か方法があるわ。そんな汚い仕事・・・」英里はそう言ってから、はっとして口をつぐんだ。亜希の顔にはあきらめの表情が出ている。

「汚い・・・ね。やっぱり言うと思ってたわ。そう、英里には汚らしい職業でしょうね。」

「ああ・・・ごめんなさい。口がすぎたわ。ごめん。」

「謝つてすむことつて、この世にどれだけあるのかしら？」亜希は特に責めるでもなくつぶやいた。

「私、あなたを助けたいの。それだけ。」英里はうなだれ、涙がこぼれそうになるのを必死に堪えた。

「英里に助けてもらおう必要はないわ。今、私は自分で自身を救済してるんだから……。悪いけど、帰つて。もうこれ以上話すこともないし。」亜希は英里の荷物をまとめ、押し付ける。英里を追い立てるように玄関へと向かわせた。

英里は亜希の顔を見るが、亜希は目を合わせようとしない。

「また、連絡するわ。」英里が言うと、亜希が無言で首を振る。そして扉が閉められた。

四

四

夏休みが終わった。英里にとっては忘れられない夏になった。自分が大人になり、新しい世界が広がったのをうれしく思った。早く亜希に報告したい。家の電話からではとても話せる内容じゃないから、今日のこの日をとっても心待ちにしていたのだ。

教室に入ると、こんがりと日焼けした生徒達が、口々に自分の休みを半ば興奮しながら話し合っていた。高校二年の夏休み。年頃の男女にとっては、重要なシーズンだった。来年には受験勉強が控えているから、この夏は本当に貴重な時間だった。

英里は窓際の席で他の生徒と楽しそうに話している彼を見つけ、こっそりと視線を送った。彼も気づいて恥ずかしそうに笑う。二人が経験したこと、二人にしかわからない時間。視線を交わす、それだけで英里の胸はときどきと鳴り始めた。

亜希は一番後ろの席で、鞆から教材を取り出しているところだった。英里は小走りに近寄る。すると亜希が顔を上げ、「どうだった？」というような表情を見せる。英里はうれしくなって満面の笑みを返した。

「ねえ、話したいことたくさんあるの。」英里は興奮しながら彼女にしゃべりかけた。

「わかってるわ。じゃあ、ちょっと廊下に行こうか。」亜希が優しく笑い、英里の腕を引いた。

二人は心地よい風が吹き抜ける廊下を並んで歩き出した。英里は我慢しきれず小声で話だす。

「初めての経験だった。なんて言うの？うまく言葉では伝えられないんだけど。」

「わかるわよ。うれしかったのね？」亜希が言う。

「そう、そうね。うれしかった。でも正直に言うと、みんなが言うように気持ちいいなんて、ひとつも思わなかったけど。最初うまくいなくて。二人ですごく焦っちゃった。もう、しなくてもいいかも、なんて思ったけど。でもちゃんと最後までできたと思うわ。」

「じゃあ、森君も初めてだったのね？」亜希が問う。
「聞かなかったけど、たぶん。だって、もつとうまくできるはずでしょ？初めてじゃなかったら。なんか彼、可愛かったよ。」英里が声を更にひそめる。「避妊具の付け方も、なんだかきこちなかったし。」

「よかった、ちゃんと配慮してくれたのね。そういうこと、考えてくれない男も多いから、多分。」亜希がほっとした声を出した。

「うん、ちゃんとしてくれた。すごく優しかった。」英里は思い出すと、自然と頬が染まる気がした。

二人は始業のチャイムが鳴るまで、特に目的地もなく校内をうろつろした。立ち止まって話すと、誰かに聞かれてしまうんじゃないかと、気が気じゃなかった。

「亜希の夏休みは？もつとたくさん遊べたら良かったんだけど。」英里が訊ねる。

「私はバイトばかりだった。英里は夏期講習に行ってたしね。」

「小学生の頃は、夏休みも毎日一緒だったけれど、大きくなるというる用事も増えてきて、昔みたいに一緒にいられなくなるんだね。」英里は少し寂しく思った。

「それが大人になるってことじゃない？」亜希が言う。「でもそうね、寂しいわ。」

亜希はまた髪の毛をバツサリと切っていた。彼女は髪を自分でアレンジするのが好きで、しょっちゅうころころと髪型が変わった。すぐに自分ではさみをいれてしまうので、しばらく亜希のロングヘアを見ていない。

「また切ったのね。素敵。」英里がほめる。すると亜希はちょっと照れたように首を傾げ、短い髪の毛に手をやる。

「なんだかどんどん短くなってるような・・・我慢できないの。肩にかかるともう切りたくなっちゃって。」

「似合ってるよ、本当に。うらやましいわ、亜希が。すごい才能を持つてる。」

「才能だなんて、大げさな。」亜希がちよつと笑った。

「才能よ、なんの勉強もしなくて、それだけ自分で切れるんだもの。美容師にでもなったら？」

「美容師か・・・じゃあ、専門学校に行かなくちゃとれないよね、資格。」

「行けばいいじゃない。」

「・・・うん、考えとく。ほんとはね、卒業したらもう就職しようって思ってたから。」

「働くの？」

「うん。大学っていうタイプでもないと思うし。」

「美容師、いいと思うよ。亜希がお客さんの髪の毛を触ってるの、ちゃんと想像できる。じっくりくるわ。」英里が言うと、亜希はともうれしそうに笑った。

「そろそろ始まるわ。」亜希が廊下にかかる時計を見て言うと、すぐにチャイムが鳴りだした。二人は慌てて廊下を走り、先生が来る前に教室にたどり着いた。お互いほっとした表情を見せる。そしてまだまだ暑いこの季節に走ってしまったことを、少なからず後悔した。

- - -

何度連絡をしても、亜希からの返答はなかった。メールも電話も、何もなし。もしかしたら着信拒否にしているのではないかと疑うほど、亜希は英里を完全に無視していた。

英里はどうしても彼女に仕事を辞めてもらいたかった。お金をもらって、男性の性的な行為につきあう。時に屈辱的な言葉をかけられ、

触られたくもない男に触られ、あげく知りもしない男の……。英里は想像すると叫びたくなつた。亜希がそんなことできるわけがない。きつと彼女は精神的に参つてゐるはず。今すぐ、やめさせなければ。

亜希の告白。英里は当時ひとつも気づかなかつた。いつ、そんなことがあつたのだらう。英里はその時の自分の鈍感さと幼さに、気が狂うほど腹が立つた。もしかしたら何かできたかもしれない。彼女の支えとなり、もっと早く助け出せたかもしれない。英里の親に相談するとか、児童虐待の申請をするとか。英里は悔しくてたまらなかつた。

亜希。

英里のこれまでの人生を支えてくれた大切な友達。
今度は自分が彼女を救うのだ。

五月の連休も、英里はバイトばかりしてゐた。亜希のことがあつたので、時間ができれば積極的に働いた。彼女を助ける、それしか考えることができなかつたのだ。

朝の八時半、駅へと続く商店街を、出勤前のサラリーマンが足早に歩く。休日のない人々。

英里は開店前の喫茶店へと入つていった。飴色に輝く板張りの床。すでに店主がモップで床を磨き始めていた。

「おはようございます。」英里は丁寧に挨拶をする。店主も優しく応答した。

「英里さんは、最近熱心に働くね。」店主はチェックの長袖シャツを肘まで折上げ、すでにうっすらと汗をかいていた。窓は開け放たれ、青葉の香りが店内を通り抜ける。

「はい、今ちよつとお金を貯めたいので。」英里は笑顔で答えた。

「そうか、道理で。」店主は納得というような顔をして、少し困つたような顔をした。英里はそれを見て戸惑う。

「あの、何か私、失敗しましたでしょうか。」英里がおそるおそる

訊ねると、店主は柔らかな笑顔を見せた。

「いやいや、違うよ。ただね、以前の英里さんは、この仕事がとても好きで心を込めてしていたように見えたのだけれど、何だか最近心ここにあらずのように思えたから。お金のために働くって気持ちになったからだなあ、と思ったただけだよ。」店主は床を磨く手を止めて、英里の顔を静かに見つめる。

「すみません。」英里は思わず謝った。

「謝る必要はないよ。働く基本は、生きていくためだからね。でも、何かあったのかな？あまりに突然の変化だったから。」

英里は少しためらった後、親友が風俗で働きだしたこと、今自分が無視されていることを話した。亜希を知る人にはしゃべれない。でも大学の友人と完全に打ち解けている訳でもない。英里の話を聞いてくれる人が欲しかったのは事実だった。

店主は穏やかな年月が通り過ぎたことを物語るその顔、その目尻の皺をほんの少し深くし、英里の話を聞いてくれた。英里は徐々に心が軽くなるのを感じる。

亜希も自分に話してくれれば、きっと心が軽くなる、英里は更に強くそう思った。

「亜希とはもうずっと一緒に、彼女のことはよくわかっています。彼女が今の仕事を喜んでしてるとは思えないし、きつと仕事の後、毎日泣いてるはず。これまで互いに支え合ってきたのに、なぜかこの件に関しては彼女はかたくなで、私の言葉を一切聞き入れないし、私自身を拒絶してるんです。私は彼女を助けること、金銭的にも精神的にも、心からしたいと思ってるし、そのことに何の迷いもないのに。彼女にもっと頼られてもいいと思うんです。」

店主はゆっくりと頷くと、少し首を傾げる。その目が英里をなだめるように光っている。

「でも、その子は助けてほしいって思っただろう？」

「本当は思ってるはずなんです。もし私が彼女なら、きつとそう思うはず。それに彼女だって私がこう言い出すの、わかるはずなんで

す。だって、彼女ならきつと、私を全身全霊で救おうとしてくれるから。」英里はしゃべりながら、徐々に目がじわりと熱くなってくるのを感じた。もう何日も、亜希と話していない。彼女が泣いてるかもしれないのに。彼女が助けてと叫んでいるかもしれないのに。「なぜ、私を無視するんでしょうか。私を拒絶したって何の解決にもならないし、無視って一番、何とかというか卑怯ですよ？何も言わずに、わかるでしょ？って言われるなんて、じゃあ、何のために言葉はあるのかって、思いませんか？」

「彼女は考えてるのかもしれないよ。」店主が言う。

「じゃあ、考えるから時間が欲しいと言うべきです。彼女はそうやって言える人です。だから理解できなくて。どうして私をこんなにも拒絶するのか。全部終わりにしてしまおうと思っっているようで。」

私は・・・私は失いたくないんです、彼女を。「英里は語尾が揺れてしまうのを我慢できなかった。」

「英里さんは、再びその彼女と会ったとき、この話題には触れずに以前と同じようにつきあうことはできる？彼女が仕事を辞めると言うときまで、ずっと待ってられる？」店主は泣き出した英里の腕をなでながら、そつと言った。

「いいえ。」英里は即座に強く否定した。英里は一刻も早く、亜希を救いたかった。そんな仕事、もう一日たりとも続けてほしくなかった。

「そうか・・・じゃあ、その彼女は英里さんがそう言うの、わかっているんだね。」店主が英里から目をそらし、窓から入ってくる風を辿るかののように首を動かした。英里は店主のその温和な横顔をそつと見る。

「人間はそれぞれの経験や習慣に基づいて生きている。だからとても複雑だ。そんな複雑さを受け入れることができれば、きつと戦争なんか起きないよ。でも人間はどうしても譲れないことがある。例えば信仰。皆、自分の信ずるものが唯一だと考えているけれど、実際はそうじゃないよね。同一の宗教を信仰していても、解釈は受

け取る人にゆだねられていると言つてもいい。英里さんはその子を失いたくないって言ったよね。」店主は英里の顔を再度見た。目尻には皺がより、口元は笑みを浮かべている。

「本当の喪失つていうのは、僕が思うに、その子から受けた親切や、掛けてもらった優しい言葉、共に過ごした楽しい時間さえも、苦しくて思い返したくないと拒否してしまうことじゃないかな？」

英里はその言葉を頭で反芻する。そして首を振った。

「今までも問題を二人で乗り越えてきたんです。きつと今回もできるはず。彼女が私の言葉を聞いて、手を伸ばしてくればきつと。」英里は自分に言い聞かせるように言った。

「ありがとうございます、聞いてくださって。少し心が楽になりました。」英里は店主に精一杯の笑顔を見せた。

「そうか、それならよかった。」店主は英里の腕をぽんぽんと軽くたたき「じゃあ、開店準備をしようか。」と言って、再び床を磨き始めた。

五

五

卒業が迫っていた。英里は大学に無事合格し、保育士になるべく勉強を始めることになる。亜希は専門学校に通うことを決め、家も出ることにしたようだった。その潔さに圧倒されるも、英里は彼女を心から応援しようと決めていた。

空は灰色、どんよりと重く、今にも雪が降ってきそうだ。マフラーをぐるぐると首に巻いているが、ほんのわずかな隙間から痛いほどの冷たい風が入り込む。二人は首をすくめながら、駅前のファストフード店まで早足で歩いた。あそこなら百円で暖かいコーヒーが飲める。ただそれだけの理由で、二人は道を急いでいた。いつもなら購買部の裏の小さなスペースで、二人額を寄せながらしゃべるのだが、今日は学校で話をしたくなかった。亜希の話をゆっくりと聞きたかったからだ。

「津田君が九州の大学へ行くことが決まったの。」先週、亜希はそう英里に伝えた。

「そうか、第一志望に受かったんだね。」英里は複雑な思いで言った。

「うん、よかった。本当に。」亜希は愛しげな笑みを浮かべる。

「遠距離になるの？」英里はおそろおそろ訊ねた。

「・・・ううん。多分終わり。」亜希が前を向いて答える。

教室にはもう二人しか残っていなかった。進路の決まった生徒達は、一目散に学校を飛び出ていく。残り少ない高校生活を、思う存分楽しむためだ。教室の空気中に残っていた生徒達のぬくもりも徐々に冷え、いつのまにか二人は身体を縮めて話していた。

「津田君は何も言わないの？」

「うん。」亜希がうつむき、机の落書きをその細い指でなぞる。

「亜希がついていくっていう選択肢もあるんだよ。」亜希のそんな様子を見て、英里は思わずそう言った。

すると亜希は強く首を振る。「そんなことされても、津田君はきつと喜ばない。」

英里はその語調の強さに、もう彼女が別れを決めているのだと、はつきりと悟った。

「津田君が・・・」亜希が聞き取れないほどの声で続ける。

「週末、湖へ行かないかって誘うの。二人きりで・・・彼のおじさんの別荘があるみたいで・・・どう思う？」亜希は、顔の細さをカバーするような丸いふんわりとした長めのボブの髪を、耳にかけて。困ったような、心細いような、そんな顔。

「何を躊躇しているの？もう終わりなのに、今更深い仲になっても仕方がないってこと？」英里は訊ねる。亜希は更に一層弱々しげな表情を見せる。津田君と亜希はもう二年もつきあっているが、驚いたことにまだ一度も男女の関係になっっていなかった。話を聞くとどうやら、亜希の方がためらっているようだった。

「・・・怖くて。」亜希が言う。「でも、彼とつながりたいっていう気持ちもある。だから、迷ってる、行くの。」

「はじめは誰でも怖い。あたり前だと思うけど。でも、とても幸せよ。肌が触れて、相手の体温を全身で感じることも。もちろん、亜希が決めることだと思うけど、私なら行くな、きつと。これで最後だつて思っても。」

「社会に出る前に、知っておいた方がいいのかしら、それとも知らない方が？」亜希が訴えるように問いかける。

「知るって？その行為自体をってこと？・・・知らなくてもいいんじゃない？」英里が答えると、「違う。愛されるってこと。」と亜希が静かに、でも強く言った。

「愛されること・・・そう、それなら知っておいた方がいいかも。」英里の心に、大切に愛されたという記憶がよみがえる。それはとて

もすばらしい経験だった。

「・・・そうか。そうだね。知ってた方がいい。」亜希は何度も頷くと、英里に笑顔を向ける。

「ありがとう、行くことにした。」

「よかった。じゃあ、週明けに感想を聞かせてね。亜希が津田君とすばらしい時間を過ごせるよう、祈ってるよ。」英里は亜希の手を取ると、ぎゅっと握りしめた。

週末を彼と過ごした亜希の表情を見て、それがとても大切な体験だったことはすぐにわかった。彼女の笑顔は晴れやかだったし、別れの悲しみも後悔も、何も見えなかったからだ。静かに穏やかに愛を交わして、終わりにしたのだろう。

ファストフード店に入ると、禁煙席の隅に二人でホットコーヒーを手に座った。同じ高校の生徒はいない。座席は半分ほど埋まっていた。

カップの熱さに指先が痺れる。二人はしばらくそのまま手を温め、落ち着いたところでコートとマフラーを脱いだ。

プラスチックのふたを取り、ミルクと砂糖を淹れる。使い捨てのマドラーでぐるぐるとかき回す。

亜希がふたを外したまま、カップに口を付ける。白い湯気がほわりと彼女の顔を囲み、長いまつげに水滴をつけた。

「終わったちゃった。」亜希が言った。

「うん。」英里は静かに同意した。

「全部、終わっちゃった。」亜希は再びそう言って、それから目を潤ませた。

- - -

英里は亜希に手紙を書いた。けれどその手紙がちゃんと届き、彼女が目を通したのかもわからない。まったくの音信不通になっていた。

亜希が英里をいつまで無視しつづけるのか、終わりが見えないこの状況に、英里は途方にくれていた。彼女ならきつと、返事をくれる。そう信じて出した手紙も、もう二ヶ月放置されている。あまりにもあやふやで、答えがない。英里はいつまでも先に進めないし、それは亜希だつて同じはず。英里はなえる心を自身で励まし、亜希に直接会いに行くことを決めた。

亜希が帰宅するのはきつと深夜。英里はその頃を狙つて、彼女のアパート前で待つことにした。電車のない時間であれば、邪険に「帰れ」とも言わないだろう。

夏とはいえ、夜は肌寒い。二階の外廊下から道を見下ろすと、街灯が光つてはいるが、住宅街の真ん中では物音一つしない。本当に寂しかった。時折道を通る人が、いぶかしげに英里を見上げていく。

「閉め出しをくらつたのか？」嫌らしい笑みを浮かべ、あからさまな視線を送ってくる中年男性もいた。そんな目つきを見るたびに、英里はより強く亜希を救いたいと考える。あんな男達につきあわなくては何らない仕事なんて、屈辱きわまりない。あの亜希がそんな仕事を。英里は怒りにも似た激情が身体を駆け巡るのを感じた。

サンダル履きの足が冷たく冷えてきた。しゃがんで足の指先を手のひらで強くこする。

するとコンクリートの床から、かんかんかと音が伝わってきた。顔を上げると、そこに亜希がいた。大きく膨らんだ布靴を肩からぶらさげ、その靴の重みに倒されないよう、身体を反対側に傾けていた。

そしてうんざりしているような顔。

英里はその表情に涙が出そうになるが、唇を結んで立ち上がり、亜希をまっすぐ見つめた。

「やっと会えた。」英里がそう言うと、亜希は英里を腕で押しつけて、家の扉を開けようとすする。

「会つても無視はするのね。」

亜希はちらりと英里を見ると、また首を振って無言で部屋に入ろう

とする。

「もう終電も出た。私帰れないんだけど、それでも門前払いなの？
コーヒーの一杯でも飲みたいわ。」英里はくじけそうになる自分を
必死に奮い立たせる。

亜希は眉間に皺を寄せて、それでいて無表情に英里を見つめると「
入れば。」と言った。

「ありがとう。やっと声が聞けた。」英里は亜希の後ろから部屋に
入った。

蛍光灯をつけると、最後にこの部屋を訪ねたときと変わらぬ様子。
けれど、部屋自身が疲れ、色あせているように見えるのは、英里の
思い過ごしだろうか。英里は明かりのもと、亜希の顔を再び見る。
以前にはなかった肌荒れが見え、急激に年を取ったように見えた。
亜希は鞆を床に投げ捨てるように置くと、ユニットバス内にある洗
面所で手を念入りに洗う。そしてうがいをした。

英里はその姿を横目で見ながら、ラグの上ですわった。ちくちくす
る感触に、引越し祝いをまだ贈っていなかったことに気づいた。
購入してからそれほど経っていないはずなのに、すでにラグの毛は
ほつれている。

亜希はこちらに視線を合わせず、キッチンに立った。がたがたなる
食器棚からカップを二つ出す。

「悪いけど、飲んだらかえって。タクシーは駅前で捨てるから。私、
明日も早いのに。」

「ちゃんと話ができるなら、帰るわ。亜希の邪魔をしたい訳じゃな
いから。」英里は答えた。亜希は黙々とインスタントコーヒーを入
れる。お砂糖とミルクをたっぷりと入れる。英里の好み通り。それ
を見てると、より一層亜希を愛しく、そして離したくないと思った。
部屋にコーヒーのよい香りが広がる。バイト先のはまったく別の
香りだが、これもまた心落ち着く。むしろ英里達がこれまで飲んで
きたコーヒーのそれであり、英里は懐古的な気持ちになる。

亜希はシンク横に置かれた袋からロールパンを一つだし、それをか

じりながら、テーブルについた。

「夕食を食べてないの？」英里が訪ねると「そんな暇ないから。」と亜希が素っ気なく答えた。

そして二人の間にいたたまれない沈黙が流れた。

亜希からは強い拒絶のオーラが放たれている。明らかに迷惑そうな態度。

ふと英里の脳裏に、これまで何度となく見てきた亜希の笑顔がよみがえった。なぜこんなことになったのだろう。英里は声が震えてしまいそうになるのを、必死に耐えて話だした。

「なぜ、連絡をくれないの？」

「・・・忙しいから。」亜希がパンをかじりながら答える。

「忙しくても、今忙しいから後で、の一文ぐらい書けるよね。私とちゃんと向き合っていないわ。」

すると亜希が片方の頬を上げて笑う。

「向き合うつて・・・そんな必要ないでしょ。」

「必要はあるわ。亜希の今とこれからのことを話したいって言うてるんだから。」

「話したつて無駄よ。」

「無駄じゃないわ。亜希はこの間、私に聞いた。いつまで続くかわからない援助を変わらず続けられるのかつて。答えはイエスよ。私にはあなたのためなら、努力を惜しまないし、力になりたいつて本当に強く思ってる。その気持ちか嘘かどうかつて、亜希ならわかるでしょ。」

「きつと今は、そんな風に思ってるんですよ。英里には自分で背負うものなんて何もないし、この言葉に責任なんてないんだから。」

「責任は持つわ。当たり前でしょ。」英里は身を乗り出し、訴えた。するとまた亜希は静かに笑って「言うことがあまりにも予想通りで笑っちゃうわ。英里はね、まだ学生なの。親の庇護のもと生きてる。もちろん英里はそうあっていい境遇なんだから、それを疑問に思ったり、恥じたりする必要なんかないだけだね。でもこれから英里

が社会に出て、就職して結婚して子供を産んで、自分で責任を負わなくてはならない、守らなくてはならない存在ができてきたら、そんなこと言ってられなくなるわ。優先順位つてあるのよ、人間関係には。英里は英里のことだけを考えていればいいのよ。」

「亜希が不安に思う気持ちも、迷惑をかけたくないって思う気持ちも理解できるけど、私はあなたを救いたいの。今まで私、亜希にたくさん助けてもらった。二人で問題を乗り越えてきた。喧嘩したこともあったし、噛み合わないって思うときも確かにあったけど。でも二人で乗り越えてきたじゃない。今回もきつとそう。亜希が少し私を向いて、そして頼ってくれば。亜希、自分でもわかってるでしょ。どんどん痩せて、疲れて、昔のような笑顔が出なくなってる。この生活のせいよ。亜希の心がぎりぎりの状態なの。私は亜希にそんな暮らしをさせたくない。ねえ、頼つて。心を開いて。もう無視だなんて卑怯な対応しないでよ。」英里は必死だった。どうしても亜希にわかってもらいたかった。今のこの気持ちが本物だっていうことを。

「疲れてはいるけど、私は毎日充実してるわ。英里が色眼鏡で私をみてるだけ。あんな仕事を選んでるから、きつと疲弊してるだろうって。」

「違う！亜希を見ていればわかるわ。亜希が泣いているところも、自分に嫌気がさしていることも、でも生活のために辞められないことも。ねえ、仕事を辞めよう。私が援助するから。あんな仕事、亜希ができるわけないわ！」

「英里は・・・自分のために、私に仕事を辞めてもらいたいのね。」
「自分のため？なんでわかんないの？亜希のために決まってるでしょ！」英里は声が徐々に大きくなるのを止められない。

「だって、私は一言も辞めたいなんて言っていないわ。私が選んで、私が働いてるの。英里はね、自分の友達があんな仕事をしてるなんて思いたくないの。だから必死に止めようとしてる。全部自分のためよ。自分が心地よくいたいたため。私が連絡をしなかったのは、英

里は絶対善人面してこんな風に言ってくるだろうってわかったから。話し合うだけ無駄なのよ。この対話の方が、私を疲弊させてるわ。そっちこそ、なんでわかんないの？返事がない時点で気づいてもよさそうなのに。」

英里が必死になればなるほど、亜希はどんどんと遠くへ離れていく。なぜわかってもらえないのか。なぜ全部を拒絶するのか。

「どうして、そんな酷いことが言えるの？」英里は指先で涙を拭いながら、亜希の顔を見る。

「二人で今までやってきたじゃない。何が違うの？今までと。私たちは何も変わらないはずなのに。どうして……。もう……。もう、元には戻れないの？」英里は身体が震えてくる。嗚咽で肩が上下した。

亜希を見やると、英里の涙ながらの必死の訴えに、さらに冷ややかな表情を見せていた。

「元に戻れないかって？」亜希は自分のカップの口元を、指でゆっくりとなぞった。

「飲んでいるコーヒー、そのカップ、座っているラグ、英里が触れているものすべて。」亜希があざ笑うかのように英里を見る。

「私が見ず知らずの男のあそこを、この口でしゃぶってやった、そのお金で買ったのよ。」

英里は思わず、テーブルから手を離す。その様子を見て、亜希が静かに笑う。

「今日もたくさんの男のをしゃぶったわよ。私が口をつけたこのカップから、あんたコーヒーを飲めるわけ？」

英里は言葉がでてこない。

「元に戻るかって？あんたがもう、戻れないのよ。私のこと汚いって思ってるから。」

英里は固まって動けなかった。

「コーヒーはごちそうしたわ。帰って。」亜希はそう言うと、テーブルを片付けだした。台所に向かい、英里に背を向ける。英里は何

も言うことができず、そのまま荷物を持って、静かに部屋を出るし
かなかった。

六

六

部屋の明かりを消すと、カーテン越しに、踏切を照らすほのかな光が見える。電車が通過するたびに、ぐらぐらと揺れるこの家で英里は大きくなった。

英里は天井を見つめた。見慣れた天井。小さいころは、天井のシミが人の顔に見えてしかたがなかった。

ベッドの上から、床に敷いた布団に寝る亜希に声をかける。

「眠れそう？終電は一時前だから、それまではちよくちよく揺れるの。」

「ふかふかのお布団。これ、お母さんお昼間に干しておいてくれたのかな？」亜希が口元を布団で覆っているのか、こもった声で訊ねてくる。

「うん、たぶん。亜希が来るって言ったたら、張り切ってたから。」

「そうか、素敵なお母さんだよ。なんというか、日本の母って感じ。」

「そう？私はあの母親しか見てないから、至って普通の親って感じがするけど。」亜希の小さく笑う声がする。

「亜希のお母さん、ここ何年も会ってないけど、相変わらずきれいなのかな？最初に会ったときはびっくりした。本当にきれいにしている、華やかで。嫌でも自分の母親と比べちゃって、落ち込んだりした。」

「母親は・・・あまり変わらないわ。そうね、ちょっと老けて疲れたかも。でも相変わらず自分が女性でいることに、全力を注いでるわ。」亜希が嫌悪感を見せる。

「とげのある言い方ね。」英里は亜希が母親の話をするときの言い方が嫌いだった。

少しの間、亜希は考えるように黙り込んだが、静かに話だした。

「私、この家に産まれたかった。英里のような人生を送りたいって、いつも思ってた。」亜希が言う。英里はそれを聞いて思わず身を起こした。亜希もゆっくりと身体を起こす。暗闇で白いパジャマを着た亜希が、ぼんやりと浮かんでいる。英里が子供の頃から使っている学習机には、大学名が印字してある封筒が置かれ、あと何日かで脱ぐことになる高校の制服がかけられた足下には、大学の入学式で履こうと思っている真新しいパンプスが置かれていた。今ここには、英里のこれまでとこれからが全てあった。

「亜希、私の人生にあなたがいなかったらって考えると、とても怖いわ。ねえ、私たち、お互いの人生も生きてるって思うときがない？あなたは私の人生を生きて、私はあなたの人生を生きてる。そんな風に思えるほど、私たちは一緒にきたわ。私の人生を生きたくかっただなんて、今更何を言うの？もう一緒に歩いてるわ。」英里は暗闇の中、亜希の顔を見つめ言った。普段は恥ずかしくて言えないようなことも、この場でなら抵抗なく口から出てくる。これからの二人の進路が違うということが、英里を感傷的にさせているのかもしれなかった。亜希も同様なのか、英里のこの言葉に笑うことなく、まじめな顔で見つめ返した。

「英里、あなたといるとき、確かにあなたの人生を生きているような、そんな気持ちになることがあった。十分に愛された少女が辿る道を、私も共に。大好きな先生に手紙を書いたり、歩きながらきれいな石を拾ったり、本当に些細なことに心から笑えて、そしてあり得ないような悲しい事柄に同情の涙を流す。英里がいなかったら私も、これからの日々が怖くてたまらない。」

英里はベッドから降りて、亜希の側に寄り添うように座る。

「大丈夫、私たちはこれからも一緒よ。目指す方向は違ってもきつと一緒に。」英里は心を込めて言うと、照れて少し笑った。亜希もつられて笑みを返す。

「また、泊まりにきて。母親が喜ぶわ。私は亜希の新居に押し掛け

るから。」

「泊まりにくるなら、その前に引越し手伝ってよね。あと、布団は持参して。」亜希がからかうように言うと、英里はぶつとふくれた。

「何それ？もてなしはないわけ？」

「ないない。全部自分でやって。私忙しいんだもん。」

窓の外から踏切が降りる音が聞こえてきた。

「揺れるわよ。」英里が小声で言ったとたん、電車が勢いよく通るがたがたという騒音で空気が激しく揺れた。

「でしょ？」英里が笑うと、亜希も「終電までは眠れそうにないな。」と笑って答えた。

亜希のことを考えると、胸が苦しくなる。彼女の刺々しい物言いや、冷たい視線。

激しい喪失感が英里を襲っていた。

こんな風になる前、亜希のことを考えると、支えられているという安心感と、支えているという使命感で、身体全部が暖かくなるような、そんな気持ちがしていたのに、今は苦しくてたまらなかった。きつと亜希は二度と英里には連絡してこないだろう。

あの目。

このままうやむやに、英里という存在が最初からなかったかのように、生きていくつもりなんだろう。英里にはそれがたまらなかった。どうしたらいいのか。英里は繰り返し考え、そして再び亜希に会いに行くことに決めた。

夏の終わり。

蝉は相変わらず激しく鳴き、蒸し暑くはあったが、時折ふく風にはすでに秋が始まる匂いがした。

英里はプレゼントを手に、亜希を再び待った。今度はアパートの前

ではなく、亜希の利用する駅の改札で。

朝から駅のベンチに座り、彼女をひたすらに待った。夏休み中なので、学生の数はいくらでも多くはないが、部活へ行くのだろう学生の団が目の前を通りすぎる。ほんのちよつと前まで、英里と亜希はあの学生の群れの中にいた。なんでもない話、たわいもない話、それだけで何時間も一緒にいられた。そんな毎日。

手に持っていたミネラルウォーターがほとんどなくなった頃、亜希が歩いてくるのが見えた。英里の心臓が激しく動き始める。すでに汗はたくさんかいていたが、それとはまた別の冷たい汗が背中を伝う。時計を見ると時刻は朝の九時半頃。学校が休みでも、やはり亜希は朝早くからバイトに出かけていたのだ。

英里がベンチから立ち上がると、亜希が英里の姿を捉えて立ち止まる。そしてまたうんざりしたような顔をした。

亜希は今日も大きなバッグを肩からかけ、斜めになりながら懸命に立っていた。髪を明るめのブラウンに変え、あか抜けた印象になっている。短いスカートからは相変わらず細い足が見えていたが、以前よりも病的な感じが薄らいでいる。少し体重が増えたのかもしれない。

亜希は英里の前を無言で横切ろうとする。英里はその腕を必死につかんで止めた。

「・・・急いでの。」亜希は英里の目を見ようとしない。

「少しだけだから。」英里は迷いのない強い口調で言う。

「悪いけど、無駄な時間は使いたくないの。」亜希が腕を振りほどこうとすると、英里は一層力をこめた。

「私の存在を全部否定し、拒絶するほど、私を心から憎んでいるの？一緒に過ごした時間も、交わされた大切な言葉も、全部を否定するほどに？」

英里の大きな声に、亜希がやっと目を合わせる。そして、亜希が力を緩めた。英里はほっとする。

「少しだけよ。遅刻する気はないの。」亜希は言うと、英里と向き

合った。

「ありがとう。すぐに終わるわ。」英里は亜希を人の流れを妨げないところまで引っ張っていき、手を離した。

「で？」亜希が高圧的に問いかける。

英里は手に持っていたプレゼントを差し出した。

「出かける前に荷物になってしまっけれど、約束していた引っ越し祝いを渡したくて。」

亜希が「今？」というようにないぶかしげな顔をする。

「ラグの上に引くブランケット。夏だからウールのものは買えなかった。だからコットン地の大きなものを買ったわ。嫌でなければ使って。」英里はそう言って、白い包みを渡す。

「・・・ありがとう。それだけ？じゃあ・・・。」亜希が踵を返そうとするのを、英里が再び引き止める。

「まだ、もう一つ。」

「何？」亜希が軽くため息をついた。

英里は深く息を吸い、意を決したようにしゃべりだした。

「亜希は、仕事を辞めるつもりも、私の援助を受けるつもりも、全くないのよね？言われるだけ迷惑ってことは、変わらないのよね。」

「・・・まだ、言ってるの？そんなこと。」亜希が軽蔑したような視線を送る。

そんな亜希の表情を見て、英里は「わかった。」と頷いた。

「じゃあ・・・。」英里は亜希の手を取る。夏なのに冷たい手。英里は亜希の目を見つめた。

「これまで長い間、私と共に時間を過ごしてくれて、本当にありがとう。」英里はもう何度も頭の中で繰り返した言葉を、ゆっくりと口に出す。亜希の目が大きく見開かれる。

「私は亜希のことをうやむやにして、思い出さたくない過去の人にしたくないから。あなたと過ごした時間は、とても素晴らしかった。美しく、暖かく、貴重で、幸せだった。だから、自己満足だけれど、言わせてほしいの。」英里は涙が出そうになるのを、奥歯を噛んで

耐える。

「これからのあなたの人生に、心から幸せだと思える瞬間が、何度も何度も訪れるように。心から祈ってる。」

英里は思わず亜希の細い肩を抱きしめる。これまでに、何度も彼女を抱きしめた。彼女がすらく震えているとき。歡びに満たされているとき。

彼女の髪が頬に触る。彼女が身を固くしているのがわかる。英里はより強く彼女を抱きしめた。

「本当にありがとう。」英里は涙が頬を伝うのを感じる。柔らかな風が二人を包むように通り抜けた。

英里は身体を離し、両手を取って、再び亜希の目を見つめる。

「さよなら。」

英里は思いを込めて微笑んだ。

亜希は驚いた表情のまま、くるりと背を向け無言で改札へと向かう。英里は静かにその姿を目で追った。

改札を通り過ぎると、電車が到着したのか、たくさんの人がホームから階段を下りてくる。その波に亜希が飲み込まれ見えなくなる。

英里はそれでもしばらく彼女を見送った。

ほどなくして人々がはけると、亜希はまだ階段下で背を向けたまま、立ち尽くしていた。

亜希が振り向く。

そして英里の方を見ると、手をあげた。

「さよなら。」

そして笑顔を見せた。

片方の頬には、えくぼ。

何度も見たことがある。

彼女の本当の笑顔。

亜希はまた背を向けると、足取り軽やかに階段を駆け上がっていく。

さよなら。

あなたは、私の大切な人。

さよなら。

大好きよ。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7908o/>

大好きな人

2010年11月21日06時46分発行